

静岡県立大学短期大学部東日本大震災復興支援活動
「HPS スマイル・プロジェクト」第7弾報告

*この活動はオートレースの補助（24-0-047）を受けて実施しました。

◇日時：平成25年3月9日（土）～12日（火）

◆場所：福島県相馬郡新地町

- 1) 雁小屋応急仮設住宅集会場（10日）
- 2) 小川応急仮設住宅集会場（11日）
- 3) 新地町合同慰霊祭竹灯篭設置及び追悼式参加（11日）

◇参加者：HPS 3名（石井、島崎、渡辺）、保育士 1名（若目田）

介護福祉専攻1年学生 12名、社会福祉学科教員1名

◆実施概要：

財団法人 JKA によるオートレース補助事業として今年度3回目で最後の復興支援活動は、継続的な子ども遊びの必要性からこれまでのプロジェクト同様に2か所の応急仮設住宅及び新地町児童館においてウィークエンド企画を計画していたが、東日本大震災2周年の新地町行事、児童館行事の都合、参加するHPSの都合が合わず、児童館での実施を見送り、2か所の応急仮設住宅集会所での子どもたちや保護者への遊び支援、子どもの遊びを見ることを楽しみに集まる仮設住宅の高齢者へのふれあいなど、HPSの専門性を活かした支援を実施することとなった。しかし、11日月曜日の活動では、子どもたちが保育園・幼稚園や小学校に登校のため不在であり、午後は町を上げて取り組む合同追悼式が開催されるため制限が多い中で、高齢者及び保護者を対象とした新しい遊び支援を展開することができた。また、HPSの活動に大学生が加わることで遊びの幅が広がることが確認できるなど、新たな復興支援活動の在り方を検証するよい機会となった。

清水災害ボランティアネットワークの協力を得て、学生・教員はレンタカーによる移動のため9日夜9時に出発。途中、東北自動車道阿多太良SAで仮眠し、10日朝に活動場所である雁小屋仮設住宅に向かう。今回参加するHPS3名と保育士1名は東北新幹線白石蔵王駅で合流し、駅でレンタカー1台を借り、現地集合となった。ともに復興がいまだに進まない海岸部を視察後、仮設住宅で活動開始。空容器にカラフルなビーズやプラ片を入れ、PVA糊と水を調合して作る「癒しボトル」、紙皿に思い思いに色を塗って作る「皿まわし」、ストローと紙の輪で作る「グライダー」、毛糸で作る「シュシュ」など子どもたちの創造性を引き出し、作品を完成させて遊べる達成感や楽しさをねらった工作を中心に遊びを展開した。



大震災から2年を迎えた11日の午前从小川応急仮設住宅の集会場内で前日同様の遊びのセッティングを行う。スマイル・プロジェクトが主な対象とする幼稚園児・保育園児や小学生は平日のため学校等に登校しているので今回の遊び支援活動の狙いを高齢者に設



定した。同じ集会場で足湯やお茶会を実施する清水災害ボランティアネットワークの活動とのコラボレーション企画であり、足湯やお茶会に集まる高齢者等を主な遊び支援の対象に、高齢者個々のペースや作業能力に合わせて、HPS・保育士及び学生たちが新たな遊び支援を展開。手先が器用で、積極的に工作に取り組む高齢者もいれば、細かい作業が苦手であったり、材料などを使うことがもったいないという理由から作業に自ら取り組まない高齢者もいるなど、その対応は子どもたちと大きく異なった。しかし、個別に寄り添いながら作業を手伝ったり、ほとんど学生が作るのを見守るなどしながら、遊びに加わることに消極的な高齢者たちも楽しく活動に参加していた。

また、活動に参加した多くの高齢者が「孫へのいいお土産ができた」「作った物を飾れる」など、自らの作品を家族に渡したり、部屋に飾ったりすることを楽しみとする姿が見られた。子どもたちの場合、特に低年齢であれば、作品を作っている時間を楽しむことが主となり、完成度の問題もあるので成果物を大切に持ち帰って家族に渡したり、部屋に飾ることは少ない。工作も小さな子どもでも作れるものとなると、完成後の活用は難しくなる。しかし、HPS・学生などが複雑な部分を担い、子どもたちが楽しめる色塗りや簡単な作業をするなど、すべて子どもが作業を担わずに完成度の高い作品を作ることは遊びの幅が大きく広がる。また、大学生が参加することで、新たな視点や創造性が発揮され、HPSだけで取り組むものより、作業プロセスや作品に面白みやユニークさが加わった。今回の高齢者に個別に関わる遊びの展開から、遊び支援の対象や内容・方法に新たな展開が見られた。午後2時30分から小川応急仮設住宅の同じ敷地にある新地町体育館において合同追悼式が行われた。清水災害ボランティアネットワークがその玄関前に新地町で津波の犠牲になった116名の方を追悼する116本の竹灯籠を設置・点火する作業を本プロジェクト参加メンバーも協力した。合同慰霊祭は政府主催合同追悼式のモニター視聴と町独自の2部構成であったが、遺族や被災者ではないが慰霊祭に参加でき、本プロジェクトの総括的な活動にするつもりである。



＜雁小屋仮設住宅での活動の様子＞



女の子に大好評の「癒しボトル」の工作



糊と水の比重の違いでが落ちる速度が変わる



作り方は簡単で幼児でも創造的に楽しめる



わかりやすく遊びをボードを使って説明



模造紙をつなげて等身大のモデルを作る



それに自由に色を塗ったり、絵をかいたり



オリジナル紙皿は完成後に回して楽しめる



塗り絵のコーナーも誰でも気軽に楽しめる

＜小川仮設での活動の様子＞



ポスターを掲示し活動の参加を呼びかけ



仮設集会場の入り口にもポスター掲示



高齢者個々の状況等に合わせたグライダー作り



真剣な表情で取り組むシュシュ作り



HPS の編み物を見ているのも楽しい



学生の協力で完成した作品は孫へのお土産



子どもが小学校に行っているお母さんも参加



思い思いに作った癒しボトルを手に記念撮影

<合同追悼式・被災地視察の様子>



追悼式会場前に 116 本の竹灯籠を設置



遺族や被災者と共に合同追悼式に参加



竹灯籠の中に遺族がメッセージを記入



思いが詰まったその一つ一つが胸を打つ



更地のまま復興が進まない坂元駅前



坂元駅ホームをえぐる津波の爪痕



小川仮設の住民が住んでいた新地町釣師地区



釣師地区に立てられた旗も新しくなっていた